

平成 21 年 3 月 27 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18730489
 研究課題名（和文） 「羅生門的接近」を応用した現職教員研修プログラムの開発
 研究課題名（英文） In-service teacher training program development applying "Rashomon approach"
 研究代表者
 根津 朋実（NETSU TOMOMI）
 筑波大学・大学院人間総合科学研究科・准教授
 研究者番号：50344958

研究成果の概要：

研究課題名の「羅生門的接近」は、映画『羅生門』（黒澤明監督、1950年）これを調査法の文脈で引用した諸研究、および OECD-CERI と文部省（当時）との共催による国際セミナーの報告書に由来する。特に最後の報告書は、「羅生門的接近」の語が日本で知られる契機となった。本研究課題では、先行事例や先行研究を手がかりに、各教員による認識の多様性を前提とした新たな現職教員研修向けのプログラムについて開発し、実際に公立学校で複数年度にわたり試行した。

交付額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2006年度 | 700,000 | 0 | 700,000 |
| 2007年度 | 600,000 | 0 | 600,000 |
| 2008年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,900,000 | 180,000 | 2,080,000 |

研究分野：カリキュラム評価、カリキュラム開発

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：羅生門的接近、羅生門式手法、教員研修、多元的視点、校内研修、ワークショップ、カンファレンス

1. 研究開始当初の背景

筆者がこの研究の着想を得たのは、博士学位論文執筆（2001年）に際し、「羅生門的接近」に関連した諸研究を概観する過程であった。その後、前職（埼玉大学教育学部）および現職（筑波大学人間総合科学研究科）において、授業や各種研修会講師の機会を経て、教員養成・現職教育に携わってきた。ここで、参加者の関心の多様性を活かした研修プログラムの必要性を痛感した。さらに、別途「多

元的現実論」を検討するうち、羅生門的接近との理論的親和性に気付くとともに、現職研修への応用可能性に学術的関心をもつに至った。

「羅生門」概念は、教育学、社会学、および文化人類学にわたって、広く用いられてきた。教育学では、1974年の国際セミナー報告書による紹介の水準にとどまり、ために理論上の精緻さを欠き、実証的な成果の産出が課題となっている。

この点、早くから調査研究への応用を中心

に検討されてきた、他分野の成果が役立つ。「多元的現実論」は、1970年代末以降、社会学者シュッツ（Schutz, A.）による研究成果が注目され、今日に至る。とはいえ、この議論と「羅生門」概念との関連性は、なお十分に検討されたとはいえない。

「羅生門的接近」を用いた教員研修プログラムは、管見する限り、新潟県上越市立高志小学校がワークショップ形式で実施しているという報告が、インターネットのホームページ上にある。この実践は、1974年の国際セミナーと関連が深いとされる。

国外では、映画『羅生門』への批評記事、および先述した社会学・文化人類学等の諸成果を除けば、「Rashomon」という語は学術的な意味では用いられない。映画『羅生門』の状況を念頭に、当事者同士の言い分が異なる、混乱状況を指す用語の域にとどまる。

2. 研究の目的

この研究の目的は、現在の現職教員研修に対し代替案を提示するため、カリキュラム開発における「羅生門的接近」、およびその認識論的背景にある「多元的現実論」にもとづき、各教員による認識の多様性を前提とした、新たな現職教員研修向けのプログラムを開発することにある。

3. 研究の方法

前述の構想・目的のもと、平成18～20年度（2006.4-2009.3）の3カ年間にわたり、以下の方法を用いた。

(1)教育学、社会学、および文化人類学にわたって用いられる「羅生門」概念を、文献をもとに整理した（第一年次を中心に実施した）。

(2)教育学、とくにカリキュラム研究で用いられる「羅生門的接近」の認識論的背景に、「多元的現実論」(multiple realities)が認められることを、理論的に解明した（第一年次を中心に実施した）。

(3)「羅生門的接近」を用いた教員研修プログラムを開発するため、特徴的な実践事例を調査した（第一年次から第三年次にわたって実施した）。

(4)最終的に、新たな教員研修プログラムを提案し、学校での実施試行をもとにモデル化した（第二年次および第三年次を中心に実施した）。

4. 研究成果

(1)研究の主な成果

第一年次の研究成果は、次の三点に分けられる。

第一点は、カリキュラム開発における「羅生門的接近」(1974 文部省・OECD-CERI 共催国際セミナー)、文化人類学の「羅生門式手法」(Lewis, O.)に関し、社会学の概念「多元的現実論」(Schutz, A.)を手がかりに、両者に共通する理論的基盤を解明したことである。すなわち、諸資料に基づき、「羅生門的ノ式...」という語により示される認識を「羅生門的認識」と命名するとともに、この認識が、「複数の人間が、同一の事象に対し、異なる意味付与を行うことにより、結果的に多様な認識を産出する」という一連の過程を含意することを提示した。この成果は、日本カリキュラム学会における口頭発表、ならびに海外査読誌に掲載された学術論文により示された。

第二点は、教員研修および教員相互による授業研究に関し、関連文献資料を収集・整理することにより、授業後の教員による検討会を重視する「カンファレンス」(稲垣忠彦1986『授業を変えるために カンファレンスのすすめ』国土社などによる)の手法が、本研究課題にとって重要な先行研究となることを見出した点である。

そして第三点は、二つの調査協力校において、それぞれ異なる教員研修のスタイルを実践・観察したことである。埼玉県志木市立志木小学校では、非常勤講師・常勤講師等を対象とし、校内研修のテーマに関する講義(計6回)、および各教員による授業参観・事後指導による校内研修(計10回)を実施した。他方、新潟県上越市立高志小学校では、いわゆるワークショップ型(ブレイン・ストーミング型)の集団的校内研修に参加する機会を得た。

以上の資料は、研究成果報告書にまとめられ、調査協力校の教職員を含む関係者に配布された。

第二年次の研究成果は、次の三点に分けられる。

第一点は、授業を題材とした「カンファレンス」(稲垣忠彦による)の手法と、本研究課題で注目した「ワークショップ型研修」とを対比し、両者の異同を整理することにより、「ワークショップ型研修」の理論的視座を明らかにしたことである。その成果は、日本カリキュラム学会における自由研究発表、および学術論文として公表された。

第二点は、筆者が独自に開発した校内研修の方法を、公立小学校において開発・試行したことである。すなわち、カンファレンスからワークショップ型研修への推移を手がが

りとして、授業観察者のメモ書きによる授業記録を用い、これをもとに授業者を含む複数の教員で話し合うことにより、日常的かつ授業実践の結果に密着可能な、簡易版の校内研修プログラムを開発した。

そして第三点は、ワークショップ型（ブレイン・ストーミング型）の校内研修がもつ特質および意義を解明するため、第一年次に引き続き新潟県上越市立高志小学校に注目し、同校教員に対しグループ・インタビューを行い、同意を得てその記録を資料として提示したことである。これは、第一年次報告書で指摘した通り、「学校生活における『羅生門的接近』型研修が帯びる『日常性』『常態化』の様相を、具体的に解明する」作業に対応する。

今年度も、これら三点に関連する資料を研究成果報告書として作成し、協力校および関係者に配布した。

第三年次の研究成果は大きく次の二点である。

第一の成果は、ワークショップ型研修は教員に多様性と日常性を提供することを、高志小学校教員を対象としたグループ・インタビューの記録を分析することにより、解明したことである。すなわち、発言記録を分類し、多様性については「校内研修への認識の変化」「『レポート』による記録性の確保」「校内研修の様式：『持ち寄り・持ち帰り』」といった内容を見いだした。同様に、日常性については、「『普段通り』：『肩肘張らない』」「時間への組織的配慮：『厳密さと公平さ』」と分類した。

第二の成果は、第二年次に引き続き、筆者が開発した校内研修の方法（授業メモに基づく簡便な事後指導型の校内研修プログラム）を、公立小学校の協力を得て試行したことである。その際、第二年次の試行結果を参考に、第二年次報告書に掲載した簡易版の校内研修プログラムを一部修正して実施した。このプログラムを実際に経験した複数教員による評価データ（ふりかえりシート）および観察者のメモ書きによる授業記録（授業メモ）の実物について、それぞれ関係各位の承諾を得、報告書に掲載した。

最終年度も、上記二点に関連する資料を研究成果報告書として作成し、協力校および関係者・関係校等に配布した。

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究課題の成果については、国内専門学会での研究発表、関係者・関係校教職員への年次報告書送付、および国内・海外学術雑誌への論文掲載により、広く周知するよう配慮した。

(3)今後の展望

教員研修の中でも、校内研修はなお課題が多く、本研究課題ではごく限られた問題を扱ったに過ぎない。指導案検討型から事後指導型、指導講評からカンファレンスへと、今後も本研究課題が提起した視点の転換、ならびに授業メモを中心とした簡易な校内研修手法の定着が、それぞれ望まれる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計2件)

根津朋実、「校内研修のプログラム開発に関する事例研究—カンファレンスとワークショップ型研修とを対比しつつ—」、『筑波大学教育学系論集』、査読有、第32巻、2008、27-38。

根津朋実、「『羅生門的接近』再考—『羅生門式手法』との比較を通して—」、『韓国日本教育学会編『韓国日本教育学研究』、査読有、Vol.11 No. 1、2006、107-125。

〔学会発表〕(計2件)

根津朋実、「校内研修のプログラム開発に関する事例研究—カンファレンスとワークショップ型研修とを対比しつつ—」、『日本カリキュラム学会第18回大会、2007年7月8日、埼玉大学。

根津朋実、「『羅生門的接近』再考—『羅生門的手法』との比較を通して—」、『日本カリキュラム学会第17回大会、2006年7月8日、奈良教育大学。

〔図書〕(計3件)

根津朋実、「『羅生門的接近』を応用した現職教員研修プログラムの開発（第三年次）」、『平成20年度科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号18730489）報告書、2009、全40。

根津朋実、「『羅生門的接近』を応用した現職教員研修プログラムの開発（第二年次）」、『平成19年度科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号18730489）報告書、2008、全43。

根津朋実、「『羅生門的接近』を応用した現職教員研修プログラムの開発（第一年次）」

平成18年度科学研究費補助金(若手研究(B) 課題番号18730489)報告書、2007、全68.

〔その他〕(計1件)

根津朋実、「高志小学校とわたし」上越市立高志小学校編『超研究開発「そうい」 ゆらぎからのクリエイション』、2006、37.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

根津 朋実 (NETSU TOMOMI)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・准教授

研究者番号：50344958

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし